

臨床教育学講座教員による 2008 年度授業科目一覧

[学部提供科目]

■臨床教育学基礎演習Ⅰ（齋藤直子）

授業の目的と内容：「ケアと自己信頼の教育」を主題に、自己を信頼することが、自己同一化を志向するのではなく、他性との関わりをすではらむような、自己－他者の関係性、およびそこにおけることばとの関わり直しを、哲学的テキストの読解を通じて考える。

受講に必要な予備知識：英語の原著と邦訳を併せて講読するので、哲学に関わる英語の読解力が必要とされる。

成績評価の基準と方法：出席と学期末レポート

テキスト／参考文献：ネル・ノディングス著／佐藤学 監訳『学校におけるケアの挑戦：もうひとつの教育を求めて』（ゆみる出版 2007 年）；ラルフ・W・エマソン著／酒本雅之 訳『エマソン論文集』（岩波書店 1972 年）他

■臨床教育学基礎演習Ⅱ（西平直）

授業の目的と内容：E・H・エリクソンの思想と言葉を検討する。その思想は、精神分析と、社会科学と、実存思想の交点に位置する豊かな広がりを持つ。アイデンティティ、ライフサイクル、ジェネレイショナルサイクル、などの言葉を通して、その豊かな地平を解きほぐしたい。

受講に必要な予備知識：特になし。しかし受講希望者は、下記のテキストを用意し、目を通しておくこと。

成績評価の基準と方法：平常点とする。

テキスト：西平直『エリクソンの人間学』（東京大学出版会、1993 年）

参考文献：エリクソン『青年ルター』上・下（西平直訳、みすず書房、2003 年）

■教育人間学講読演習Ⅰ（齋藤直子）

授業の目的と内容：「エマソンの道徳的完成主義」を主題としたスタンリー・カベルの映画論に関わる著作を講読する。関連する映画の視聴も行う。

受講に必要な予備知識：高度な英語の読解力を必要とする。

成績評価の基準と方法：出席と学年末レポート

テキスト／参考文献：Stanley Cavell, *Cities of Words: Pedagogical Letters on a Register of the Moral Life* (Cambridge, MA.: The Belknap Press of Harvard University Press, 2004)

■教育人間学講読演習Ⅱ (齋藤直子)

授業の目的と内容：教育人間学講読演習Ⅰに同じ

受講に必要な予備知識：教育人間学講読演習Ⅰを履修していること。高度な英語の読解力を必要とする。

成績評価の基準と方法：出席と学期末レポート

テキスト／参考文献：Stanley Cavell, *Cities of Words: Pedagogical Letters on a Register of the Moral Life* (Cambridge, MA.: The Belknap Press of Harvard University Press, 2004)

■臨床教育学概論Ⅰ (西平直)

授業の目的と内容：人間形成、世代継承サイクル、あるいは、人生の意味。そうした正解のない問いをめぐって、参加者各自が、自分なりの答えを見つけ出す時間とする。

たとえば：

- ・子どもは何を失って大人になるのか。発達とはどういうことか。
- ・人が人を教育するとはどういうことか。教育は援助と何が違うのか。
- ・教育は、子どもの幸せを目的とする営みであるか。
- ・人は競争することによって成長するのか。

受講に必要な予備知識：なし

成績評価の基準と方法：平常点とする。詳細は初回に説明する。

テキスト／参考文献：西平直『教育人間学のために』（東京大学出版会、2005年）

■臨床教育学概論Ⅱ (西平直)

授業の目的と内容：人間形成、世代継承サイクル、あるいは、人生の意味。そうした正解のない問いをめぐって、参加者各自が、自分なりの答えを見つけ出す時間とする。

たとえば：

- ・子どもの頃、死をどう理解していたか。大人の方がよりよく理解していると言えるか。
- ・子どもの時に十分甘えることができないと、後の人生に何らかの困難が生じるか。
- ・人は人を理解することができるか。
- ・人は親を許すことができるか。

授業に必要な予備知識：なし

成績評価の基準と方法：平常点とする。詳細は初回に説明する。

テキスト／参考文献：西平直『教育人間学のために』（東京大学出版会、2005年）

■教育人間学専門ゼミナールⅠ (齋藤直子・矢野智司・西平直)

授業の目的と内容：「自伝としての哲学」を主題に、書くこと・読むこと・語ることを通じて自己と言語を再創造することにかかわる「教育としての哲学」のあり方を解明する。

受講に必要な予備知識：難解な英語文献を講読するため、高度な英語力を必要とする。

成績評価の基準と方法：出席と学年末レポートによる。

* 臨床教育学講座で卒論を執筆予定の者は必ず履修し出席すること。

テキスト／参考文献：Paul Smeyers, Richard Smith and Paul Standish, 2007. *The Therapy of Education: Philosophy, Happiness, and Personal Growth* (London: Palgrave Macmillan, 2007).

その他関連文献のコピーを授業時に配布する。

■教育人間学専門ゼミナールⅡ（齋藤直子・矢野智司・西平直）

授業の目的と内容：稽古・習道・修行の思想を検討する。今年度は、世阿弥のテキストを読む。

受講に必要な予備知識：難解な日本語文献を講読するため、高度な日本語力を必要とする。

成績評価の基準と方法：平常点。

* 臨床教育学講座で卒論を執筆予定の者は必ず履修し出席すること。

テキスト／参考文献：世阿弥『風姿花伝』（岩波文庫）は必携。

できれば『世阿弥芸術論集』（新潮日本古典集成）を入手しておくこと。

[大学院科目]

■臨床教育学研究Ⅰ（矢野智司・西平直・齋藤直子）

授業の目的と内容：臨床教育学と臨床教育人間学の基本的文献、古典的文献を幅広く精力的に読み論文指導を行う。また、博士論文作成に向けての指導を行う。

成績評価の基準と方法：出席と発表。

テキスト／参考文献：出席者と相談の上決定する。

■臨床教育学研究Ⅱ（矢野智司・西平直・齋藤直子）

授業の目的と内容：臨床教育学と臨床教育人間学の基本的文献、古典的文献を幅広く精力的に読み論文指導を行う。また、博士論文作成に向けての指導を行う。

成績評価の基準と方法：出席と発表。

テキスト／参考文献：出席者と相談の上決定する。

■臨床教育人間学特論Ⅱ（丸山恭司：広島大学准教授）

授業の目的と内容：「他者へのまなざし」を鍵概念として教育学思考の特性を反省的に理解する。取り上げられる主題は、ウィトゲンシュタインの他者論、教育倫理学、教育学的欲望と教育運動、である。

受講に必要な予備知識：特になし。

成績評価の基準と方法：授業参加（50%）と提出課題（50%）から判断する。

テキスト／参考文献：未定

■臨床教育人間学特論Ⅰ（竹内整一：東京大学教授）

授業の目的と内容：「かなしみ」と日本人。

「かなしみ」とは、「……しかねる」のカネと同根とされる言葉で、力が及ばず、何もすることができないでいるという、みずからの有限性・無力性を切に感じとる感情であるが、同時にそれは、それを深く感じとることにおいて、他者に、また超越者に開き、繋がることもできるという感情である。ここでは、そうした「かなし」という思想感情のもっている倫理的・宗教的な意味・可能性について、何人かの思想家・文学者の、具体的な「かなしみ」の受けとめ方を踏まえながら考えてみたいと思います。

受講に必要な予備知識：特にありません。

成績評価の基準と方法：レポート。

参考文献：竹内整一『「はかなさ」と日本人』（平凡社新書）、同『「おのずから」と「みずから」』（春秋社）

■臨床教育人間学演習Ⅰ（齋藤直子・矢野智司・鎌田東二：京都大学こころの未来研究センター教授）

授業の目的と内容：自らの思想を外国語で「翻訳」し他者に伝達する過程において、言語と自己の二重性を行き来しうるような思考・執筆・応答様式の訓練を行う。国際学会で外国語の論文を発表し質疑応答に対応し、国際的学術誌に外国語で論文を投稿することができるような論文の書き方を、大学院生自身の発表とそれについての相互批評を中心にして学ぶ。

受講に必要な予備知識：知識は不要であるが、参加者は外国語（英語）による発表を行うことを求められる。

成績評価の基準と方法：出席およびレポートによる。

テキスト／参考文献：特にテキストは定めないが、*Journal of Philosophy of Education* や *Educational Theory* など、教育哲学関連の英語の国際学術誌に掲載された論文を適宜参考資料として用いる。

■臨床教育人間学演習Ⅱ（齋藤直子・矢野智司・鎌田東二）

授業の目的と内容：アメリカの哲学者スタンリー・カベルの「日常言語学派の哲学」に関わる著作を講読する。デリダやベンヤミンの関連思想とも対比させつつ、言語の継承と創造を通じた自己の再生に関わる「翻訳としての哲学」としてカベルの言語哲学がもつ可能性を解明する。

受講に必要な予備知識：講読文献の英語は難解であるため、高度な英語の読解力を必要とする。

成績評価の基準と方法：出席およびレポートによる。

テキスト／参考文献：Stanley Cavell, *Must We Mean What We Say?: A Book of Essays* (Cambridge: University Press, 1976). Jacques Derrida, *The Ear of the Other: Otobiography, Transference, Translation* (London: University of Nebraska Press, 1988).

■臨床教育学演習Ⅰ（西平直）

授業の目的と内容：井筒俊彦の論文を丁寧に読むことを通して、東洋哲学の理論的枠組み、主に、禅哲学の理論的枠組みの習得を目的とする。その理論的枠組みの中で、各自の課題を問い直すことが目指される。

受講に必要な予備知識：なし

成績評価の基準と方法：平常点とする。詳細は初回に説明する。

テキスト／参考文献：井筒俊彦『意識と本質』岩波文庫

Toshihiko Izutsu; *Toward a Philosophy of Zen Buddhism*, Prajna Press 1982

■臨床教育学演習Ⅱ（鎌田東二）

授業の目的と内容：「臨床」という言葉にはいつも、「今、ここに実存する」という現場感覚がみなぎっていて、どこかひりひりした緊張感がただよう。それはしかし、別の言葉と文脈で考えると、「遊び」の身体性とながっていて、固定観念や仕組みを破砕する「臨機応変力」を生み出す土壌ないし母胎でもある。そんな臨床感覚のありようを民俗学的知と実践を手がかりにしながら考えなおし、とらえなおし、臨床世界の広がりや深みを探っていきたい。

授業計画

1. 「臨床」における「臨」と「床」、あるいは臨機応変力と大地性
2. 臨床の現場感覚と民俗学的現場感覚—身体性と間（半）主観性と他者性
3. 柳田國男と折口信夫と南方熊楠の臨床性を考える
4. 宮沢賢治の臨床教育実験と河森正治監督『KENJIの春』と『先生はホホーッと宙に舞った』
5. フィールドワーク(1)（下鴨神社と御所）
6. 学生発表(1)
7. フィールドワーク(2)（上賀茂神社と大田神社）
8. 学生発表(2)
9. フィールドワーク(3)（東山修験道）
10. 学生発表(3)
11. 学生発表(4)
12. 民俗学と教育学のインターフェイス—「生きるちから」を問い直す
13. 「臨床」の「森」の中へ

成績評価の基準と方法：出席とレポート

参考文献：柳田國男『遠野物語』角川文庫、折口信夫『死者の書』角川文庫、鎌田東二『エッ

ジの思想—翁童論Ⅲ』新曜社、2000年。鎌田東二『翁童のコスモロジー—翁童論Ⅳ』新曜社、2000年。鎌田東二『宮沢賢治「銀河鉄道の夜」精読』岩波現代文庫、2001年。鎌田東二『聖地感覚』柏書房、2008年。細野晴臣・鎌田東二『神楽感覚』（仮題）作品社、2008年5月刊予定。

■臨床教育学課題演習Ⅰ（岡部美香：京都教育大学准教授）

授業の目的と内容：この課題演習では、教育における生命主義の豊かさと危うさについて考察する。具体的には、次の項目について、授業者が資料を提示し、基本的な枠組みを解説した後、それらをもとに参加者全員で討論を行う。(1)20世紀生物学の生命観とその教育への影響。(2)大正生命主義と大正自由主義。(3)京都学派における生命。(4)ライフサイクル—人間形成論、臨床的人間形成論。(5)“ひとの生”をどう描くか。

受講に必要な予備知識：特になし

成績評価の基準と方法：演習、とりわけ討論への参加の度合いと、学期末のレポートを、それぞれ50%ずつの割合で評価する。

テキスト／参考文献：必要・参考文献は、その都度、配布・伝達する。

■子どもの人間学演習（矢野智司）

授業の目的と内容：京都学派の人間学における死の問題と「祖国のために死ぬ」こと：今年は、前年度の戦争と教育学の授業の成果を基に、この議論を敷衍して、京都学派の人間学の「世界史的立場」と戦争との関係について考えてみたい。例えば、西谷啓治の理論では、「道徳的エネルギー」に貫かれた国家の「世界史的使命」において、死は宗教的な色彩をおび、死者は殉教者として位置づけられていることが理解できるだろう。もちろんこのように国家に宗教的性格をもたせるために、天皇神話を利用することは、「忠君愛国」を奉じた他の戦争遂行のためのプロパガンダとかわりない。このようなテキストでは、そして教育学のテキストではなおさらだが、「殉教者」の「美しい」物語が総動員されたのである。京都学派の世界史的立場の理論は、国家への神秘的な意味づけにとどまらず、さらに戦争遂行の正当性の歴史学的政治学的物語を提供し、同時にこのように「死」を意味づける物語を「国民」に提供したのである。戦時期の人間学・教育学のテキストを読む。

受講に必要な予備知識：京都学派の人間学についての基本的知識

成績評価の基準と方法：発表と出席とを総合的に判断

■国際教育研究フロンティアC（ポール・スタンディッシュ：ロンドン大学教育研究所教授、齋藤直子）

授業の目的と内容：The Therapy of Education: Philosophy, Happiness and Personal Growth

The idea that education involves a kind of therapy goes back to ancient times. We

shall discuss in this course the ways in which education can serve as, or indeed simply is, a kind of therapy; but also ways in which education may itself stand in need of therapy—perhaps through the incorporation of therapeutic approaches but especially, and more importantly, in terms of the need to retrieve education from its current state of debilitation. Through a philosophical approach, we shall reconsider possibilities of education that can serve for happiness and personal growth in an age of globalization.

The texts we shall read are difficult and demanding, and we encourage you to obtain the assigned textbooks and prepare for the course well beforehand, especially the following chapters of *The Therapy of Education*: Chapter 4 “Reading Narrative”; Chapter 5 “Learning to Change”; Chapter 6 “Practicing Dying”; Chapter 7 “Room for Thought”; and Chapter 8 “The Thoreau Strategy.” Students will be asked to participate actively in classroom discussion in English.

授業に必要な予備知識：Good command of English

成績評価の基準と方法：Attendance and final report (in English)

テキスト／参考文献：Paul Smeyers, Richard Smith and Paul Standish. *The Therapy of Education: Philosophy, Happiness, and Personal Growth* (New York: Palgrave Macmillan, 2007). Franz Rosenzweig, *Understanding the Sick and the Healthy: A View of World, Man, and God* (Cambridge, MA.: Harvard University Press, 1999); Bernhard Schlink, *The Reader* (London: Phoenix House, 1997)／松永美穂訳『朗読者』（新潮社 2003）